6／24（月）の発表

その先の、道へ。北海道
Hokkaido. Expanding Horizons.

報道発表資料の配付日時　6月24日（月）11時00分

発表項目（行事名）	第41回「全日本中学生水の作文・北海道地方コンクール」入賞者の決定について		
記者レクチャーのお知らせ	(実施日時)	発表者	
		発表場所	
概要	◆全日本中学生水の作文・北海道地方コンクール 全日本中学生水の作文コンクールは、「水の週間（8月1日から7日間）」の関連行事として、国が毎年実施しており、道としてもこのコンクールと連携して、昭和54年から北海道地方コンクールを実施し、今年で41回目となります。 ◆北海道地方コンクール受賞者 応募のあった197編の中から優秀賞（2編）と入選（4編）及び学校賞（3校）を決定し、北海道知事から賞状及び副賞を贈呈します。 なお、賞状及び副賞は発送済みで、個人賞（優秀賞、入選）の賞状及び副賞は所属中学校を通して伝達することとしております。 ◆全日本中学生水の作文コンクール中央審査 優秀賞2編は、全日本中学生水の作文コンクール中央審査の対象として国土交通省に推薦しています。 なお、中央審査において受賞した際は、再度、受賞内容等を発表させていただきます。		
参考	◆北海道地方コンクールの概要・・・別紙1 ◆入賞者一覧・・・・・・・・・・・・別紙2 ◆優秀賞作品・・・・・・・・・・・・別紙3－1、3－2		

報道（取材）に当たってのお願い	◆このコンクールは、北海道として、「水の週間」を広く啓発するための行事です。 ◆これからの北海道を担う若い世代に水の大切さや北海道の自然、世界の環境問題などを考えてもらう絶好の機会としてこのコンクールの存在や意義を広くアピールしたいと考えています。 ◆今回の入賞者の決定について積極的な報道をしていただきますようお願いいたします。	
他のクラブとの関係	同時配付 同時レク	(場所)※空知総合振興局記者クラブ、石狩振興局記者クラブ 留萌振興局記者クラブ

担当（連絡先）	総合政策部政策局土地水対策課土地水調整G主幹　大島 TEL　ダイヤルイン　011－204－5135（内線　23－713）

別紙１

第41回「全日本中学生水の作文・北海道地方コンクール」の概要

１　目的

「水の週間（８月１日～７日）」の行事の一環として国が実施する「全日本中学生水の作文コンクール」に連携し、北海道においても次代を担う中学生を対象に「北海道地方コンクール」を実施し、広く水に対する関心を高め理解を深めることを目的とする。

２　応募要領

第41回「全日本中学生水の作文・北海道地方コンクール」応募要領

国民の間に広く健全な水循環の重要性についての理解と関心を深めるようにするため、水循環基本法（平成26年７月施行）において、８月１日を「水の日」と定め、また、国では、この日からの一週間を「水の週間」とし、「全日本中学生水の作文コンクール」を実施するなど、毎年様々な行事を行っています。

北海道では、この「全日本中学生水の作文コンクール」と連携し、次代を担う道内の中学生（中学生と同じ学齢の者を含む）を対象に「北海道地方コンクール」を次のとおり実施します。

（北海道地方コンクールの優秀作文は、「全日本中学生水の作文コンクール」の中央審査に推薦します。）

１　テーマ「水について考える」（題名は自由です。）

“水の惑星”と呼ばれる地球。でもその水は、無限ではありません。海から蒸発して雲になり、雨や雪となって地上に降り、川から再び海へと循環しているのです。

地球上をめぐる限られた水を、人々は身近な生活のほか、農業や工業など多くの場面で便利に使っています。その一方で、ときには洪水や水不足の被害に見舞われることもあります。

水の恵みを利用し、災害を防ぐために、はるかな昔から現在まで、人々はさまざまな努力をしてきました。水とのつきあい方の工夫は、町のいたる所で目にすることができます。

あなたにとって、水とはどんなものですか？ 暮らしのなかでの体験や、授業で学んだことや調べたことをもとに、水についての考えを作文にまとめてみましょう。

２　主催・後援

主　　催　水循環政策本部、国土交通省、北海道

後　　援　北海道教育委員会、札幌市教育委員会、北海道中学校長会

３　応募資格　平成31年度（2019年度）に在学中の道内の中学生（中学生と同じ学齢の者を含む）

４　原　　稿　400字詰原稿用紙３枚以上４枚以内で日本語により表記された個人作品に限ります。

５　応募期限　平成31年（2019年）５月８日（水）（当日消印有効）

６　応募方法　作文には、本文の前（原稿用紙枠内）に「題名」、「学校名（ふりがな）」、「学年」、「氏名（ふりがな）」を必ず記入し、次の送付先に送付してください。なお、個別の題名は自由です。

７　送付先　〒０６０－８５８８　札幌市中央区北３条西６丁目
北海道総合政策部政策局土地水対策課土地水調整グループ　（TEL 011-231-4111 内線23-741）

８　審査、賞及び賞の発表

審　　査　５月に「北海道地方コンクール」の審査を行い、入賞作文を決定します。また、優秀賞作文は国土交通省が実施する「全日本中学生水の作文コンクール」中央審査に推薦します。

賞及び賞品　（１）優秀賞　３名以内（賞状及び副賞）
（２）入　選　３名程度（賞状及び副賞）
（３）学校賞　３校程度（賞状及び副賞）

賞の発表　発表は６月に行い、所属中学校を通じてお知らせし、賞状及び副賞を送付します。

９　使用権等

（１）応募作品は自作の未発表のものに限ります。
（２）応募作品の使用権は主催者に帰属します。
（３）応募作品の返却は行いません。

10　その他

（１）入賞作文は、作文のほか、学校名・学年及び氏名を国土交通省及び都道府県のホームページや作品集に掲載するほか、報道機関を含めた関係者へ提供しますので、予めご了承の上、ご応募ください。
（２）本コンクールの応募作文に記載される個人情報は、本コンクールの運営に必要な範囲内で利用します。また、応募者の同意なく、本来の利用目的を越えて転用することはありません。

参考

国土交通省が実施する中央審査の賞（予定）

（１）最優秀賞　内閣総理大臣賞１名（賞状及び副賞）

（２）優 秀 賞　厚生労働大臣賞１名、農林水産大臣賞１名、経済産業大臣賞１名、国土交通大臣賞１名、環境大臣賞１名、水の週間実行委員会会長賞１名、独立行政法人水資源機構理事長賞１名、全日本中学校長会会長賞１名、中央審査会特別賞 必要に応じて（賞状及び副賞）

（３）入　　選　３０名程度（賞状及び副賞）

（４）佳　　作　上記受賞者を除く全員（記念品）

※最優秀賞、優秀賞受賞者の表彰は８月に東京都内で行われます。

別紙２

第４１回「全日本中学生水の作文・北海道地方コンクール」入賞者一覧

優秀賞

作　品　名	氏　名	学校名及び学年
水を受け渡す	田　近　峰　々	長沼町立長沼中学校　３年
水と一体になること	松　尾　美　利	長沼町立長沼中学校　３年

（敬称略、五十音順）

入　選

作　品　名	氏　名	学校名及び学年
世界の水事情と当たり前の暮らし	井　澤　陽　菜	岩見沢市立北村中学校　３年
水への意識	健　名　真　央	長沼町立長沼中学校　３年
世界の水不足	塩　崎　良　美	学校法人札幌日本大学学園札幌日本大学中学校　2年
誰もが水を使うために	古　瀬　信　也	学校法人札幌日本大学学園札幌日本大学中学校　2年

（敬称略、五十音順）

学校賞

学　校　名	備　考
岩見沢市立北村中学校	岩見沢市
学校法人札幌日本大学学園札幌日本大学中学校	北広島市
留萌市立港南中学校	留萌市

（敬称略、五十音順）

別紙３－１

水を受け渡す

長沼町立長沼中学校　三年　田近　峰々

私の住む長沼町。北海道だけに冬はやはり気温が低い。だが、町民の心はみな温かい。「いいから。いいから。」と笑いながら、みんながみんなを助け合ってきた。そんな長沼町は、二年前に開基百三十年を迎えた。それを記念し、開村、開墾の演劇「大地の侍－吉川鉄之助翁物語」が公演された。そこで私は、初めて長沼町の驚きの歴史、「水との戦い」を知ることになった。

長沼町は、二つの大きな川に挟まれている。さらには、低い土地が多いため、開墾当初から頻繁に水害に見舞われてきた。その数は、七十回以上。毎年のように起こる水害が、作物や家、そして人命までを奪っていったのだ。十数年もの歳月を費やして、川の流れを変える大工事が行われ、併せて堤防や排水施設が造られた。ようやく水害を防ぐことに成功したのだった。

長沼の水との戦いは、水害だけに終わるものではなかった。生活用水の確保にも、相当な苦労があったのだ。市街地など低い土地に住む人たちは、生活用水として川の水を使ったらしい。川から水を運んでくるのがまず大仕事。そのうえ、水の汚れがひどいため、一度漉して使わなければならなかった。昭和二十八年に上水道ができたが、長沼町全域にきれいな水が行き渡るようになったのは、昭和四十三年のことだったという。

多くの苦労をものともせず、困難に立ち向かい、支え合いながらすばらしい町を築いてきた長沼の先人たち。それは「水との戦い」の歴史だったのだ。今の私たちの生活があるのも、こうした先人たちのおかげなのだ。

でも私は、そんな先人たちの苦労を全く知らずに生活してきた。だから、水に関心をもったこともなかった。「蛇口をひねれば水が出る」。それは当たり前の感覚だった。水を出しっ放しにしても何も感じなかった。こんな感覚のままでいいのだろうか。先人たちの「水との戦い」の歴史は、別に知らなくてもいいものなのだろうか。

そんなはずはない。現に日本の水の資源は、年々減少しているにもかかわらず、水の使用量は逆に年々増加しているという。このままだと深刻な水不足になってしまうのは明らかだ。そうなってからでは手遅れだ。水がなければ人は生活できないし、生きていくこともできない。そんな状況を、先人たちが望んでいたわけがない。

先人たちの「水との戦い」は、今の私たちが水に無関心になり、贅沢な水の使い方をしてほしかったからでは決してない。長沼に生きる人々の暮らしに、水が不可欠で大切なものだから、苦労してまでも水と戦い、水を治めてきたのだ。

だから、今すぐに節水など水を大切にしていかなければならない。手洗い、洗顔、シャワーのときは、水の出しっ放しは厳禁だ。水を出したままにすると一分間に十二リットルもの水を消費するという。また、排水にも気を使うべきだ。コップ一杯の油を下水に流すだけで、それを浄化するために六十トンもの水が必要になる。また、水質汚染が進めば、水を飲めなくなる恐れだってある。先人たちが守ってきた水を、今度は今の私たちが守っていく番なのだ。

蛇口を開けるたびに水が出る。先人たちの思いがこもった歴史ある水だということをいつも心に刻み、大切に使っていきたい。今ある貴重な水、水の戦いから生まれてきた人々の温かい心、これらを守り、それを後世に遺していくのは、私たちでしかないのだ。だから、長沼の開祖、吉川鉄之助から始まる先人たちからの水への思いを受け継ぎ、未来の人たちへとその思いを受け渡していくこと、さらには、長沼から北海道へ、日本へ、世界へと水への思いを広めていくこと、それが今の私たちの使命だと思っている。

別紙３－２

水と一体になること

長沼町立長沼中学校　三年　松尾　美利

私は、幼い頃から水泳を習っていて、いつも水と触れ合ってきた。水中では地上ほど重力を感じないので、泳いでいると心地よくなり、水と一体になったような気がしてくるのだ。これまで自分と水との関りは、水泳だけのものだった。だが、ちょっとしたきっかけで、今までとは違った水への感覚が私の中に芽生えたのだ。

その日もプールで泳いだ後に、シャワーを浴びていた。プールの濃い塩素を流すためだ。すると近くで、

「使っていないなら、シャワーを止めなよ。無駄遣いはだめだよ。」

というやり取りが聞こえてきた。確かに無駄遣いはいけない。水は大切に使うべきものだと、何となくは理解していた。そういえばこのプールには、昔から「節水を心がけてください」という張り紙があるのを思い出した。中学生になった今、「無駄遣い」「節水」という言葉が、心に引っかかってきた。そこで、家に帰ってから、水を使っている生活を振り返ってみた。私たちは、毎日の生活の中で、お風呂、トイレ、炊事、洗濯など、水を頻繁に使っている。それも水道から、蛇口をひねるだけで、好きなときに好きなだけ水を使うことができる。調べてみると、一日に一人当たり二〇〇リットルもの水を使っているというのだ。中でもシャワーは、三分間使うだけで三十六リットルもの水を使うらしい。無意識で水を使っていれば、毎日大量の水を使ってしまうのもわかる気がしてきた。私も、プールで泳いだ後に、必ず三分以上はシャワーを浴びてきた。自分自身も無意識にたくさんの水を使っていたのだ。

さらに驚く事実も明らかになってきた。日本では、毎日、不自由なく大量の水を使用することができる。だが、水が大量にあるはずのこの地球。実は九十八％が海水で、淡水はわずか二％。その淡水の中でも私たちが利用できる水は、なんと〇．〇一％しかないのだ。そのごくわずかな水によって私たちの命や生活が支えられているのだ。今や水不足が深刻化し、世界の七億人が水不足の状況の中で生活をしている。さらに驚いたのは、水質汚染が進んでいることだ。不衛生な水であっても飲むしかないため、それが原因となり、毎日四千人もの子どもたちが命を落としているという。この事実にショックを感じた。自分よりも幼い子どもが亡くなっているのに、無関心のまま水を使い続けていいのかと、考えずにはいられなくなった。

水は有限で貴重な資源だ。この事実をしっかりと理解した上で、今すぐに大切に水を使っていかなければならない。それは人の命、生活に関わるからだ。節水に努め、流す水も汚さないこと。だから、歯磨きはコップに水をためて使うこと、シャワーはこまめに止めて、消費量を気にしながら使うこと、直接油を排水しないこと。

日本は水に恵まれているからといって無関心でいてはいけない。それは、地球規模として水への危機的な状況が迫ってきているからだ。ただ、水に困っている国に直接行って、私たちが水問題を解決することは、容易ではない。今は、インターネットで何でも共有できる時代だ。水に恵まれている日本にいるからこそ、世界に向けて水の大切さを発信し、世界中で水を大切にする取り組みを進めていくべきではないだろうか。

命を支えてくれる水。生活に必要な水。心地よさを与えてくれる水。こんな水と、私は一体感を味わっていきたいのだ。

私は、今もプールで水泳に親しんでいる。貴重で大切な水を全身で感じとり、水と一体になれるこの瞬間を、これからも感謝しつつ、幸せに感じていきたいのだ。